

桑門秀我 『選擇本願念佛集講義』 現代語訳注―第十一章―

上野忠昭

【抄録】

明治期の浄土宗学者桑門秀我の著した『選擇本願念佛集講義』は、浄土宗鎮西流白旗派の伝統的な『選擇本願念佛集』解釈を知る手がかりとなる。前号に続いて、本稿では本書第十一章の現代語訳及び注を提示する。

本稿は、佛敎大学法然仏敎敎学敎究センターの第一部門法然文献班第二班で本庄良文研究員とともに進めている桑門秀我『選擇本願念佛集講義』の現代語訳注作業の成果発表であり、前号の大意並びに第七章に続々ものである。

キーワード…桑門秀我 選擇本願念佛集講義 選擇本願念佛集

約對雜善

第十一章 約對雜善

【講義】先づ來意を述べれば、若し化佛讚歎を知らば、須く釋迦の讚歎を知るべし。當章は、念佛の功能超絶して雜善の比類に非(ざ)ることを明し、以て前章聞經稱佛の廢立の義を成ず。(五九左)

まず、この〔第十一〕章がなぜここ〔第十章の次〕に置かれているかを述べると、もし〔阿弥陀仏の〕化仏の讚歎を知ったならば、釈尊の讚歎を知らなければならぬ。この章は、念仏の効果が、雜善の効果とかけ離れて比較にならないことを明らかにし、それによって前章で述べた聞經と稱仏の廢立についての解釈をしている。

◎大科三段 初(め)に篇目。

【本文】約シテ對ニ雜善ニ讚スル念佛ヲ之文

【講義】「約對雜善」の四字は所引の散善義に念佛三昧へ乃至實非雜善爲比類と云ふ文に依る。下に至て辨ずべし。雜善は雜行なり。

○「讚歎念佛」とは、問「ふ」。經文には能修の人に約して「若念佛者」と云「ふ」。今、何ぞ所修の法に約するや(耶)。答「ふ」。所修の行業、本願勝易の行なるが故に經文は能修の人を讚ず。今は是れ推功歸本なり。題號既に本願念佛と云ふ。之を成立するを以て元意と爲すが故なり。

◎次に引文の中(に)二。先に經文。

【本文】觀無量壽經ニ云、若念佛者當知此人是人中分陀利華。觀世音菩薩・大勢至菩薩爲其勝友。當坐道場ニ生ス(六十右) 諸佛家ニ

【講義】當文は勸持流通の中、念佛を勸持する文なり。實には總じて散善をも勸持すべしと雖も、本意に約して念佛のみを擧ぐ。「若念佛者」とは、念佛は稱念なり。「者」は人者なり。

○「人中分陀利華」とは、『鈔』四(五五)(に)云く。「分陀利華とは(者)、法聰の『記』に云く、《此(こ)に白蓮華と云ふ。華中最勝の妙色なり。衆色の(之)本にし

◎大きく三段落に分ける。最初にこの章の標題。

「約對雜善」の四字は、本章に引用されている(善導)『觀經疏散善義』に「念佛三昧へ乃至實非雜善爲比類」という文があることに依っている。以下の引用文の箇所て述べる。雜善は雜行である。

○「讚歎念仏」とは、【問】質問する。「本章引用の)『觀無量壽經』の文には、修する人について「若念仏者」と云っている。ここでは、なぜ修行される法について「讚歎念仏という)のか。【答】答える。修される行業は本願による勝れた修しやすい行であるから、經文はその行を修する人を讚える。ここでは、念仏者が受ける功德を薦めて、根本である本願の念仏に帰依させようとしている。本書は題号で現に本願念仏と云う。これを論証することを本来の意図とするからである。

◎第二に引用文。引用文は二つあり、先ず經文。

【本文】觀無量壽經ニ云、若念佛者當知此人是人中分陀利華。觀世音菩薩・大勢至菩薩爲其勝友。當坐道場ニ生ス(六十右) 諸佛家ニ

この文は、『觀無量壽經』の、經文を受持し後世に広く弘める部分の中で、念仏を受持することを勧める文である。実際には総括して散善をも受持することを勧めるべきであるが、(積尊の)本意にしたがって念仏のみを擧げる。「若念仏者」とは、念仏は稱念を意味する。「者」は人を表す「者」である。

○「人中分陀利華」とは、『良忠』『決疑鈔』四(五五)(に)、「分陀利華とは、法聰の『記』に、《中国では白蓮華と云う。華の中で最も勝れた極めて美しい色である。すべての色の根本であり世に珍重されることが、念仏する衆生が世に貴ば

て、世に崇重せ爲るること、念佛の衆生の、世の貴ばる(所)る(爲)が若くなることを顯はす。故に此(れ)を舉(げ)て喩と爲す。」

○「爲其勝友」とは、當段の經文に具(さ)に現當二世の益を擧ぐ。以上は、其(の)現益なり(也)。故に私段に云く。「二尊の影護を蒙る。此(れ)は是れ現益なり(也)。」

○「當坐道場、生諸佛家」とは、此(の)二句は、其(の)當益を顯はす。佛果を成ずる處、之を道場と云ふ。此(れ)に二種あり。謂く、應化道場・眞實道場なり。

『鈔』四(五六)〔に〕詳釋す。「諸佛家」とは、極樂を指す。是れ諸佛道同の邊に約して言ふ。『鈔』四(五七)〔に〕、「問(ふ)」。往生以後、方に佛果を成ず。若し爾〔ら〕ば、應に《生諸佛家、當坐道場》と云(ふ)べ(應)再誦し。答(ふ)。大乘の本意は佛果を期するに在り。是の故に先に當坐道場を明す。所期を知り己(つ)て應に徑路を求むべ(應)再誦し。是の故に、次に生諸佛家を説く。謂く、怯弱の機、淨土に生ぜず(不)んば、設ひ沙劫を経るとも、佛果證し難し。もし淨土に生ぜば修行任運なり。無上の佛果、豈に餘なりと爲んや(耶)。(六十左)

◎後に疏文の中〔に〕二。初(め)に牒文標科。

れることと同様であることを明らかにするために、これをあげて喩えとする」⁽⁴⁾とある。

○「爲其勝友」とは、「この章に引用されている經文に詳しく(念仏の)現當二世の利益を挙げる。その中、ここまでは現世における利益である。したがって私積段に、「観音、勢至という二人の尊いお方が影のように着き従ってお護りくださるということは、現世で受ける念仏の利益である」と云う。

○「當坐道場、生諸佛家」とは、この二句は、念仏の来世に受ける利益を明らかにする。仏果を成就する場所を道場と云う。これに二種ある。應化道場と眞實道場である。〔良忠〕『決疑鈔』四(五七)に詳しく説明している。「諸佛家」とは、極樂を指す。これは、諸仏の悟りが等しいという観点から〔諸仏と〕云う。〔良忠〕『決疑鈔』四(五七)に、「問】質問する。往生してから後に成仏する。もしそうであるなら、《生諸佛家、當坐道場》と云うべきではないか。【答】答える。大乘仏教の本来の目的は成仏をめざすことにある。したがって先に「當坐道場」を挙げるのである。めざす目的を知ったうえで、そこに至る道を求める。したがって、次に「生諸佛家」を説く。つまり、さまざまな障害におそれひるんでしまう人たちは、淨土に生まれなければ、たとえガンジス河の砂の数ほどの劫を重ねても、成仏に至ることは難しい。もし淨土に往生すれば、修行は自然に進むのである。無上の悟りを開くことが、どうして遙か先であるとしなければいけないだろうか」とある。

◎引用文の二つめは〔善導〕『觀經疏散善義』。それをまた二段に分ける。先ずは

【本文】同經疏云、從若念佛者下至生諸佛家已來、正顯念佛三昧功能超絶、實非雜善得爲比類。

【講義】『疏』は『散善義』へ四七

○「實非雜善」等とは、問（ふ）。次章附屬の釋文を見るに、定散に對して「上來雖說定散へ乃至彌陀佛名」と云ふ。今何ぞ雜行のみを所對として助業を論ぜざるや。答

「ふ」。『鈔』四へ五七「に」云く、「往生の業に三重有り。

一には（者）念佛、二には（者）四種正行、三には（者）雜行なり。其（の）中に、念佛は最勝、雜行は最劣なり。

四種正行は從容不定なり。（雜行に對せば勝れたりと雖も、念佛に望むれば劣るが故に）且く最劣に對して其（の）勝

行を歎ず。再往之を論ぜば、應に念佛、定散に超絶すと云「ふ」べし（應・再読）。へ云云。當段の文は比較顯勝を

要とするが故に、且く最勝を以て最劣に對すと知るべし。

◎後に正釋に二。先づ標。

【本文】即有其五（六一右）

◎後に釋。此（の）中（に）五段あり。分文自「ずか」ら明かなり。故に科せず。

【本文】一明專念彌陀名、二明指讚能念之人、三明若能相續念佛者此人甚爲希有、更無物可以

方之。故引分陀利爲喩。言分陀利者、名人中好華、亦名人中上上華、亦名人中妙好華。此華相傳、名蔡華是。若念佛者、即是人中好人、人中妙好人、人中上上人、人中希有人、人中最勝

觀無量壽經の文を区切つて分科し（牒文）その内容を標示（標科）する。

『疏』は「善導」『觀經疏散善義』へ四七である。

○「實非雜善」等とは、【問】質問する。次章附屬の解釋の文を見ると、定散に對して「上來雖說定散へ乃至彌陀佛名」と云う。ここで、どうして雜行のみ議論の対象とし、助業を対象として論じないのか。【答】答える。「良忠」『決疑鈔』

四へ五七に次のように云う。「往生の業に三重ある。一には念佛。二には四種正行。三には雜行である。その中で、念佛は最も勝れ、雜行は最も劣る。四種正

行は勧めめるかどうか不定である。（雜行に對比すると勝れているが、念佛に對比すると劣っている）、まずは最劣に對して、最も勝れている行を讚歎するの

である。（次章で）再びこのことを論じると、まぎれもなく念佛は定散二善に超絶していると云える。へ云云。この段の文は、比較して勝れていることを明らか

かにすることを第一の目的とするので、まずは最も勝れている念佛の行を以て最も劣る雜善に對比していることを理解してほしい。

◎『觀經疏散善義』の引用文の第二は、二段に分けて正しく解釋する（正釈）。先づ標示。

◎「正釈の」第二は解釋。この中に五段ある。文の区切り（段落）は明らかなの

で分科しない。

ナリ。人^{ナリ}也。四^{ニハス}明^下專^ニ念^ニ彌^ノ陀^ノ名^者即^ノ觀^ノ音^勢至[、]常^シ隨^下影^護。亦^ク如^中親^友知^識也。五^{ニハス}明^下今^生（六一左）既^ニ蒙^ニ此^益。捨^テ命^ヲ即^ル入^ル諸^佛之^家。即^ノ淨^土是^也。到^レ彼^長時^間法^歴事^供養。因^ニ圓^果滿。道^場之^座豈^上賒^上。

【講義】「一明」以下の八字は經の「若念佛者」の句を釋す。

○「二明」以下の八字は經の「當知此人」の文を釋す。

○「三明」以下「最勝人也」に至る一節は、經の「是人中分陀利華」を解す。「人中妙好華」の下、次の法説に準ずるに、「亦名人中最勝華」の七字あるべし。疏文、之を略す。此（れ）に就て、『澤見』に二説を成ず。一義に云「ふ」、自然の略か（歟）。又、一義に云「ふ」、蔡華即ち最勝華に當るか（歟）と。今、案ずるに、初義最も穩當なり。

○「蔡華」とは、「蔡」は元と、支那の地名なり。此（の）地より産出する靈龜を蔡と名く。『論語』に「臧文仲、蔡を居く」と云ふ、即ち是（れ）也。又『史記』「龜策傳」に云「く」、龜千歲にして乃ち蓮華の（之）上に遊ぶ」と。是に由（り）て蓮華を蔡華と名く。是れ地名一轉して龜の名となり、再轉して蓮華の名となりしなり。『鈔』四八五八、參看すべし。

○「即是人中好人」等とは、俱に行者を讚歎するの稱なり。即ち五（六二右）種あり。之を五種の嘉譽と云ふ。我（が）宗、五重を相承して譽號を付するは（者）、蓋し是に基（づ）くと云ふ。而して次上の譬と次第なるは他意

「一明」以下の八字は『觀無量壽經』の「若念佛者」の句を解釋する。

○「二明」以下の八字は『觀無量壽經』の「當知此人」の文を解釋する。

○「三明」以下「最勝人也」に至る一節は、『觀無量壽經』の「是人中分陀利華」を解釋する。「人中妙好華」の後には、次の念仏者の説明に對照すると「亦名人中最勝華」の七字があるはずである。『觀經疏』の文は、これを省略している。このことについて、『持阿』『決疑鈔見聞』に二説を挙げている。一説は、「たまたま脱落したのであろうか。」という。また、一説は、「蔡華が最勝華に當たるのではないか。」という。今、考察してみると、最初の説が最も妥当である。

○「蔡華」とは、「蔡」は、もと中国の地名である。この地より産出する靈龜を蔡と名づける。『論語』に「臧文仲、蔡を居（お）く」と云うのは、即ちこれである。また、『司馬遷』『史記』「龜策傳」に「龜は千歲になると、蓮華の上で遊ぶ」と云う。これによつて、蓮華を蔡華と名づける。つまり地名が転じて龜の名になり、さらに転じて蓮華の名となったのである。〔良忠〕『決疑鈔』四八五八、を參照せよ。

○「即是人中好人」等とは、ともに行者を讚歎した名称である。それに五種ある。これを五種の嘉譽と云う。我が宗において五重を相承して譽号を付するのは、まさしく、これに基づくと云われる。そして前の譬えと正確に對應していないのは、何らかの意図があるものではない。

あるに非ず。

○「四明」等の二十四字は、經文の「觀音」以下の三句を釋す。「亦如親友」の「亦」は、華の喩に對して言ふ。

○「五明」以下は經の「當坐道場、生諸佛家」の文を釋す。中に於て、「淨土是也」までは、「生諸佛家」の句を釋す。

此〔の〕益とは、觀音勢至の影護を指す。「到彼長時」等とは、以下は「當坐道場」の句を釋す。「長時間法」は第四十六隨意聞法の願の益、「歴史供養」とは、十方世界を遊歴して其〔の〕到る所の如來を供養するを云ふ。是れ第二十三供養諸佛と第二十四供具如意の兩願の益なり。「道場之座、豈除」とは、遠からずして佛果に到るを云ふ。除は遙なり〔也〕。是れ則ち第十一必至定聚の願の益なり。

◎後に私釋の中〔に〕四。一に經釋の相違を辨ず〔る〕に二。先に問。

【本文】私問曰。經云^ニ若念佛者當知此人等^ト唯約^{シテ}念佛者^ノ而讚^ス歎^ス之^ヲ。釋家有^ニ何意^ト云^テ實非^ニ雜善^ヲ得^レ爲^ニ比類^ト相^ニ對^{シテ}雜^ニ〔六二左〕善^ニ獨歎^ニ念佛^一乎。

◎後に答。

【本文】答曰。文中雖隱^ク義意^ハ是明^{ナリ}。所以^ハ知^ル者此經既說^ク定散諸善并念佛行^ト。而於^テ其中^ニ獨標^{シテ}念佛^ヲ。喻^フ分陀利^ニ。非^レ

待^ニ雜善^ヲ云^フ何能顯^ニ念佛功超^ニ餘善諸行^ト。然則念佛者即^チ是人中好人者^ト。是待^ニ惡而所^レ美也。言^ニ人中妙好人^ト者、是待^ニ龜惡^ヲ而所^レ稱也。言^ニ人中上上人^ト者、是待^ニ下下^ヲ而所^レ讚也。言^ニ人中希有人^ト者、是待^ニ常^ニ有^ニ而所^レ歎也。言^ニ人〔六三右〕中最勝人^ト者、是待^ニ最劣^ヲ而所^レ褒也。

◎後に答え。

○「四明」等の二十四字は、『觀無量壽經』の文の「觀音」以下の三句を解釈している。「亦如親友」の「亦」は、華の喩えに對して言つたものである。

○「五明」以下は『觀無量壽經』の「坐道場諸佛家」の文を解釈する。その中で、「淨土是也」までは、「生諸佛家」の句を解釈している。「此益」とは、觀音・勢至の二菩薩が影が形に従うように、その身から離れず擁護することを指す。「到彼長時」等とは、以下は「當坐道場」の句を解釈している。「長時間法」は第四十六隨意聞法の願の利益、「歴史供養」とは、十方世界の仏国土を巡り、至つた仏國の如來を供養することを云う。これは第二十三供養諸佛と第二十四供具如意の兩願の利益である。「道場之座、豈除」とは、遠からずして悟りに到達することを云う。「除」は「遙」である。すなわち第十一必至定聚の願の利益である。

◎次に宗祖の私見（私釈）。四段ある。第一は〔引用の〕經と疏の相違を二段に分けて説明する。まずは問い。

【講義】「文中雖隱」等とは、念佛を以て雜善に對するこ 「文中雖隱」等とは、念仏と善を對比することは『觀無量壽經』の文の表面上に

とは經の文相には顯著ならずと雖も、廣く義理を探るときは其(の)意分明なり。故に「所以知」以下に於て其(の)理由を述ぶ。

○「是待惡而所美」とは、「美」は歎美なり(也)。自下或「い」は「稱」と云ひ「讚」等と云(ふ)は互ひに文を更ふるのみ。『鈔』四(五九)に、「問(ふ)。設し念佛に對する雜善は惡に非ず。何ぞ「惡人」と言ふ。答(ふ)。今好惡とは(者)即(ち)勝劣の義なり。謂く、雜行を修(す)れば利益劣るが故に是を名(け)て惡と爲す。惡業と謂ふには非ず。餘は之に準知せよ。」此(の)釋に據るに好人とは勝人と云ふ意なり。然れば下の最勝人と何の別ある。謂く、既に最の言を冠す。故に同じからず。

◎二に念佛下品に在ることを料簡するに二 初(め)に問。

【本文】問曰、既以念佛名上上者何故不説於上上品中至下下品而説念佛乎。(六三左)

【講義】「至下下品而説」とは、經文、實には下三品俱に念佛を説くと雖も、上上の言に對して且く下下と云ふのみ。問の意は、上上の法を何が故に下下品に説くやとなり。

◎後に答に四。一に總じて九品に通ずることを明す。

【本文】答曰、豈前不云、念佛之行廣互九品。即前所引往生要集云、隨其勝劣應分九品是也。
【講義】「前」とは第四章(本(三十五右))を指す。「前」とは第四章(義山)本(三十五右)を指す。

は顯れてはいなくても、そこに説かれる内容を広く探るとき、その意図は明らかである。故に「所以知」以下においてその理由を述べている。

○「是待惡而所美」とは、「美」は讚歎して誉めることである。以下、あるいは「稱」と云い、あるいは「讚」等と云うのは言葉を変えているだけで、すべて同じ意味である。(良忠)『決疑鈔』四(五九)に、「問」質問する。たとえ念仏に對する雜善だとしても、雜善は惡ではない。どうして惡人と言うのか。【答】答える。ここで言う好惡とは、勝劣の意味である。つまり、雜行を修すれば利益が劣るので是を惡と名付ける。惡業ということではない。その他も同様に理解せよ。この解釈によれば、好人とは勝人であると言う意味である。【問】質問する。そうすると下の最勝人とどのような区別があるのか。【答】答える。現に「最」の字を冠している。従つて同じではない。

◎宗祖の私見の第二段は念仏が下品に在ることを二段に分けて考察する。初めに問い。

「至下下品而説」とは、『觀無量壽經』の文には、下三品ともに念仏を説いているが、上上の語に對して、かりに下下と言っているだけである。問の意図は上の法をどうして下下品に説くのかということである。

◎後に答。答に四段ある。第一段は(念仏は)九品全体に通ずることを説明する。

◎二に別して下下に在ることを明すに二。先に直釋。

【本文】加之、下品下生是五逆重罪之人也。而能除滅逆罪餘行所不堪。唯有念佛之力堪能滅於重罪。故爲極（六四右）惡最下之人而說極善最上之法。

【講義】「除滅逆罪餘行所不堪」とは、『鈔』四へ六十

「問（ふ）。餘行の逆を滅する文證是れ多し（『法華』提婆品に提婆成佛の記別を得。『涅槃經』には、闍世得度の事を明し、本集所引の『六波羅密經』に眞言の滅逆を明〔か〕す等。答（ふ）。餘行都て逆を滅すること無しと謂〔ふ〕には非ず。今論ずる所は（者）、五逆の罪人、命終の時に臨（ん）で、與果の用を起せども（與果」とは果の將に生ぜんとするとき、因の力用を與（へ）て現在に入らしむると云ふ俱舍等の法相なり。今は獄火來現の時を云（ふ）。）、十念の功に依（つ）て滅罪得生す。此を以て規と爲す。餘行は爾らず（不）。是れ則（ち）經の現文に任せて此の義を判ずるなり（也）。」。案ずるに當文の意は餘行は都て滅逆の用なしと謂ふに非ず。極惡最下の機にして、而も命終に臨（ん）では唯念佛のみ能く逆を滅すとなり。

○「爲極惡最下」等とは、兼（ね）て伏難を通ずる意あり。難とは前に擧ぐる『鈔』の問の如し。通ずる意は其（の）業障に於ては差別なしと雖も、其（の）機根を論ずれば利

◎答の第二段は、特に下下品に在ることを二段に分けて説明する。先ず經文に対する直接の解釈（直釈）。

「除滅逆罪餘行所不堪」とは、（良忠）『決疑鈔』四へ六十「【問】質問する。念

仏以外の行が五逆罪を滅するという經文の証拠は多い（『法華經』提婆品に提婆達多が未來に成仏することの予言を得たことを説き、『涅槃經』には、阿闍世王が悟りを開いたことを説き、本集に引用する『六波羅密經』には眞言が五逆罪を滅することを説いている等）。【答】答える。念仏以外の行がすべて五逆罪を滅しないと云っているのではない。今論じているのは、五逆の罪人は命終の時に臨んで、（重ねてきた罪によつて）与果のはたらきを起こすのではあるが（「与果」とは結果がまさに生じようとするとき、（過去に作つた）原因がはたらきを与えて現在に結果を生じさせるという『俱舍論』等で説く存在のあり方である。ここでは地獄の火が現れる時を云っている）、（最後の）十念の功德によつて罪を滅して往生することができる。このことをもつて（五逆罪を滅する）規準とするのである。念仏以外の行はそうではない。すなわち『觀無量壽經』の經文そのものにしたがつて、この義をはつきりさせている。考察すると、この文の意図は、念仏以外の行はまったく五逆罪を滅するはたらきが無いと言うのではない。極惡最下の素質の者であつて、しかも命終に臨んでは、ただ念仏だけが五逆罪を滅することができると言うのである。

○「爲極惡最下」等とは、本来の意味にあわせて、内在する問題点に納得のいく解釈を与える意図がある。問題点とは前に挙げた（良忠）『決疑鈔』の問いにいうところである。納得のいく解釈とは、その（作るところの五逆罪という）業障

鈍同じからず。今は是れ極悪最下の人なり。故に此(の)機に對して極善最上の念佛を説くなり。(六四左)

◎後に引例に二。先づ天臺の例を引く。亦二 初(め)に正(し)く例を擧ぐ。

【本文】例 如下 彼無明淵源之病非中道府藏之藥 即不能治

【講義】天臺には見思、塵沙、無明の三惑に一切の煩惱を攝す。而して之を斷ずる者を空、假、中の三觀と爲す。三惑は所治の病にして、三觀は能治の藥なり、言ふ所の無明は、根本にして見思、塵沙は枝末なり。譬へば、江河の派流を異にすれども、齊しく淵源より出づるが如し。又、三觀の中に於て中道は深理にして、空、假二觀の根本たり。

譬(へ)ば、人體の皮肉は五臟六腑より起るが如し。故に無明を淵源に譬へ、中道を腑臟に喩ふ。例證の意は、空假二觀の但だ見・思・塵沙の惑を斷ずるは、定散二善の但だ善機を化する如く、中道觀の無明を斷ずるは念佛の獨り惡人を化する如し。(『鈔』四(六十六)取意)。但し圓教には三諦圓融の旨を談ずるが故に、三觀・三惑俱に本末を論ずべ(可)からざれども、今は別教所談に依ると知るべし(『牒』九(二七))。

においては差別はないが、その人の素質を論じると利鈍は異なっている。ここは極悪最下の人である。したがって、この素質に對して(五逆罪を除滅するために)極善最上の念仏を説くのである。

◎後に二つの例を引く。先づ天台(宗)の例を引いて二段に分けて説明する。初めに正しく例をあげる。

天台には見思²⁴、塵沙²⁵、無明²⁶の三惑に一切の煩惱を収める。そしてこの三惑を斷じるものを空、假、中の三觀とする。三惑は治療される病であり、三觀は治療する藥である。ここで言う無明は根本であり、見思、塵沙は枝葉末節である。たとへば、長江や黄河の支流は異なっているが、元をたどれば同じみなもと(淵源)から出ていることに等しい。また、三觀の中では中道は奥深い真理であり、空、假の二觀の根本である。たとえば、人の身体の皮肉は内臟によつて作られるのと同様である。故に無明を淵源にたとえ、中道を内臟にたとえる。例證の意味は、空觀・假觀の二觀が、ただ見思・塵沙の惑のみを斷ずることは、定善・散善の二善がただすぐれた素質を持つ人のみを導くことができるのと同様であり、中道觀が無明を斷じることが念仏のみが惡人を導くことができるのと同様だということである。(『決疑鈔』四(六十六)取意)。但し、円満完全な教え(円教)では、空・假・中の三諦が究極においてはそれぞれ別々のものはない(三諦圓融)という趣旨を説くから、三觀・三惑、ともに本末を論じるべきではないのであるが、今は中道は空・假とは別物だと捉える、菩薩だけに對する教え(別教)の説に依っていると理解しなければいけない(『直牒』九(二七))。

◎後に今に合す。(六五右)

【本文】今、此五逆重病淵源。亦此念佛靈藥府藏。非此藥者何治此病。

◎後に「天台の例を」今の議論に合わせて解釈する。

◎後に真言の例を引く中〔に〕二。初〔め〕に正〔し〕く例を擧ぐ。亦二 先に總釋。

◎後に真言〔宗〕の例を引いて二段に分けて説明する。初めに正しく例をあげる。これについてまた二段に分ける。先に全体的な説明

【本文】故弘法大師二教論引ニ六波羅密經ニ云、第三法寶者所謂過去無量諸佛所說正法及我今所說所謂八萬四千諸妙法蘊。乃至調伏純熟有緣衆生。而令阿難陀等諸大弟子一聞於耳皆悉憶持。攝爲五分。一素咀纜、二毘奈耶、三阿毘達磨、四般若波羅密多、五陀羅尼門。

【講義】「弘法大師二教論」とは、『顯密二教論』を指す。

「弘法大師二教論」とは、『弁〕顯密二教論』を指す。特に弘法大師の字を上につけるのは、道安の『二教論』と区別するためである。

特に弘法大師の字を冠するは、道安の『二教論』に簡別せんが爲なり。

○「第三法寶」とは、法寶に就て教・理・行・果の四法あり。此〔の〕經の中、第一に理果法寶、第二に行法寶、第三に教法寶を明〔か〕す。今は即〔ち〕第三教法寶の文なり。

○「調伏純熟」とは、「調」は三業を訓練し「伏」は過非を制伏するなり。訓練制伏して能く機根を成熟するを純熟と云〔ふ〕。

○「第三法寶」とは、法寶に、教・理・行・果の四法がある。この『六波羅密經』の中で、第一に理果法寶、第二に行法寶、第三に教法寶を説明している。これは第三教法寶を説明している文である。

○「調伏純熟」とは、「調」は三業に訓練（訓練）を積むこと、「伏」は過ちを制伏して現れないようにすること（制伏）である。訓練制伏して素質が成熟することを「純熟」と云う。

○「阿難陀等」とは、此〔の〕下に擧ぐる所の五藏結集の人を出す。謂く、阿難は素咀纜、優婆離は毘奈耶、迦旃延は阿毘達磨、文殊は般若、金剛手は陀羅尼藏を結集す。今四人を略して「等」と云〔ふ〕。

○「阿難陀等」とは、この後に挙げる五藏を編集（結集）した人を挙げる。つまり、阿難は經藏、優婆離は律藏、迦旃延は論藏、文殊は般若波羅密多藏、金剛手は陀羅尼藏を結集した。今四人を略して「等」と云っている。

○「素咀纜」等とは、以下の五藏は皆な梵語なり。素咀纜、此〔ここ〕に契經と翻す。上は法の眞理に契ひ、下は所化

○「素咀纜」等とは、以下の五藏はすべて梵語である。素咀纜は中国では契經と翻訳された。上は法の眞理に契ひ、下は教化される人々に契うので、「契」と云

の機に契かふが故に、「契」と云ひ、義理を貫穿して散失せざらしむるが故に經と云ふ。毘奈耶、此に調伏と云（ふ）（調伏の解は上に出す）。阿毘達磨、此に對法と云ふ。法とは所對の境、即ち涅槃及び四諦なり。（六六右）對とは、能對の心。謂く、無漏の慧を以て四諦を對觀し涅槃に對向す。以上は次の如く經・律・論の三藏なり。般若波羅蜜多、此に慧到彼岸と云（ふ）。是れ智恵に因て涅槃の彼岸に到るの義なり。陀羅尼、此に總持と云（ふ）。善法を總集して持して失はざらしむるが故に。上來の五藏に就て大小顯密を分別せば、前三は小乘、後二は大乘、又、前四は顯教、後一は密教なり。

◎後に別釋に二。初（め）に總じて隨根化物を示す。

【本文】此五種藏 教化有情 隨所應度 而爲說之。

◎後に別して隨根爲說を明す。中（に）三。初（め）に法說に五。一に素咀纒藏。

【本文】若彼有情樂下處山林 常居間寂 修靜慮者 而爲彼說素咀纒藏。

【講義】自下三節、經・律・論三藏、次の如く定戒慧の三學を詮す。故に各機の樂欲（六六左）に従て宣説したまふなり。樂の字、去聲に呼び、樂欲の義と爲すべし。下の三の樂の字、皆同じ。

い、義理を貫き通して散失しないようにするので經たてと云う。毘奈耶は、中国では調伏と云う（調伏の解釈は上にある）。阿毘達磨は中国では對法と云う。法とは對せられるところの對象、すなわち涅槃及び四諦である。對とは、對する主体の心である。つまり、煩惱を断つたけがれない智慧によつて四諦を觀じ、涅槃に對して向かう。以上は順序通りに經・律・論の三藏である。般若波羅蜜多是中国では慧到彼岸と云う。これは智慧によつて涅槃の彼岸に到るという意味である。陀羅尼は中国では總持と云う。善いことがらを總て集めて保持して失われないようにするからである。上記の五藏について、大乘・小乘、顯教・密教を分類すると、前の三藏は小乘、後の二藏は大乘、又、前の四藏は顯教、後の一藏は密教である。

◎後に二段に分けて個々の説明をする。初めに素質に應じて教化することを總体的に示す

◎個々の説明の第二は素質に應じて教えが説かれたことを三段に分けて説明する。最初は經文の説明。五段に分けるうちの第一に素咀纒藏。

而爲彼說素咀纒藏。

これより以下の三節は經・律・論の三藏であり、順序通りに定・戒・慧の三學を明らかにする。故に相手の願ひ求めるところに従つて（三藏を）説かれたのである。「樂」の字は去聲で発音し、願ひ求める（樂欲）という意味に取らなければならない。以下の三つの樂の字も皆同様である。

○「静慮」とは、本と色界の定に名く。謂く、静は欲界の散地を簡び、慮は無色の劣慧を簡ぶ。但し、此こは、出世間一切の禪定を指す。

○「静慮」とは、本来は色界の精神統一の呼称である。すなわち、「静」という語は、欲界という精神統一しない境界と区別するものであり、「慮」という語は無色界における働きの鈍い智慧と区別するものである。ただしここでは、煩惱を断つために働くすべての精神統一を指す。

◎二に毘奈耶藏。

【本文】若彼有情樂習威儀護持正法一味和合シテ得久住ク而爲彼説毘奈耶藏。

◎第二に毘奈耶藏。

【講義】「威儀」とは、『浄業記』に云く、「威有（り）て畏るべ（可）く、儀有（り）て像（り）て像るべ（可）し」と。是れ、律儀戒法を云ふ。第十二章に戒福を明す。下に至（つ）て知るべし。

「威儀」とは、『浄業記』に「威嚴が有つて人が畏れ従い、風儀が有つて人が做つてしまうこと」とある。ここは、戒律（律儀戒法）を云う。第十二章に戒福を説明しており、そこに至つて知るべきである。

○「護持正法」とは、凡そ正法を護持するには、戒律に依らざるを得ず。次に「習威儀」と云（ふ）は、即ち「令法久住」の爲めなり。戒は佛法の壽命とは蓋し是の謂ひなり。

○「護持正法」とは、そもそも仏の正しい法を護り伝えるためには、戒律に依らなくてはならない。前に「習威儀」と云うのは、即ち「仏の教えを永くとどめさせる（令法久住）」ためである。「戒は佛法の壽命である」とは、思うにこの意味である。

○「一味和合」とは、僧は和合を以て義とす。譬（へ）ば、江河の派流異なりと雖も、大海に入れば（六七右）、同一の鹹味と成るが如し。『礼讚』には、「同入和合海」と云レ。

○「一味和合」とは、僧は和合が本来の意味である。たとえば、長江や黄河の支流は異つていても、大海に入れば、同一の塩味となるのと同じである。『往生礼讚』には、「同入和合海」と云つている。

○「令得久住」とは、前の所謂る正法をして久しく世に止住せしむるなり。

○「令得久住」とは、前に述べたように仏の正しい教えを久しく世にとどめさせることである。

◎三に阿毘達磨藏。

◎第三に阿毘達磨藏。

【本文】若彼有情樂^{ニハ}下説^ニ正法^ヲ分^シ別^シ性相^ヲ循環^ニ研覈^{シテ}究^{セント}竟^ト甚深^ヲ而爲^レ彼説^ニ阿毘達磨^ヲ藏^一。

【講義】「分別性相」とは、有爲無爲一切の法の麁性相状なり。謂く、智慧を以て諸法の性相を分別解釋するなり。

○「循環研覈」とは『牒』九(二七)〔に〕「師(の)仰(せ)に云(く)、循環は周匝の義、所詮問答の姿なり(也)。研覈は琢磨の義なり(也)。所詮決擇の義なり(也)。」

○「究竟甚深」とは甚深なる法門の義理を推し究むるを云[ふ]。

◎四に般若藏。

【本文】若彼有情樂^{ニハ}下習^ニ大乘眞實智慧^ヲ離^{セント}於我法執著^ヲ分別^ト而爲^レ彼説^ニ般若波羅密多^ヲ藏^一。

【講義】「大乘眞實智慧」とは所謂の般若なり。般若とは何ぞや。謂く、諸法畢竟皆空と解了する智慧なり。故に阿毘達磨小乗の智慧に簡別して、大乘眞實と云[ふ]。

○「我法執着」とは、五蘊假和合の衆生を執して實我と爲すを我執と云ひ、五蘊等の諸法を執して實有と認むるを法執と云ふ。今我法執着の虚妄分別を離れんと樂欲する衆生の爲めに般若を説き、諸法皆空の旨を明して、我法二執を離れしむ。

◎五に陀羅尼藏。

【本文】分別性相とは、(性相とは)因縁の和合によるものも因縁によらないものも、すべての存在の不变である実体(体性)と外に現れるすがた(相状)である。つまり、智慧を以てすべての存在の本体と現象を分析し解釈することである。

○「循環研覈」とは〔聖罔〕『決疑鈔直牒』九(二七)に「師は次のように仰せられた。循環はめぐりまわる(周匝)という意味であり、仏の教えに説かれることを問答する姿である。研覈は研ぎ磨く(琢磨)という意味である。仏の教えの正しい意味を選び取って結論を出すという意味である。」とある。

○「究竟甚深」とはこの上なく理解困難な仏の教えの真意を推しはかつて考え究めることを云う。

◎第四に般若藏。

【本文】若彼有情樂^{ニハ}下習^ニ大乘眞實智慧^ヲ離^{セント}於我法執著^ヲ分別^ト而爲^レ彼説^ニ般若波羅密多^ヲ藏^一。

「大乘眞實智慧」とは、いわゆる般若である。般若とは何かというと、すべての存在は、究極は皆空であると理解する智慧である。故に阿毘達磨小乗の智慧と区別して、大乘眞實と云う。

○「我法執着」とは、五蘊⁽³⁹⁾が仮に和合してなりたっている衆生に執着して、実体的な我があるとすることを我執と云い、五蘊等のすべての存在に対して執着して実体として有ると認めることを法執と云う。ここでは、我執・法執の誤った分別を離れたいと願う衆生のために般若を説き、すべての存在は実体がなく皆空であるという旨を明らかにして、我法二執を離れさせるのである。

◎第五に陀羅尼藏。

【本文】若彼有情不能受持^ハ契經調伏對法般若^ヲ。或復有情造諸惡業^ニ四重八重五無間罪謗方等經一闡提等種種^ノ。

重罪^ヲ使^ル得^テ銷滅^ス。速疾解脫頓悟^ニ涅槃^ヲ而爲^レ彼說^ニ諸^ノ陀羅尼藏^ヲ。

【講義】『鈔』四(六二)に云(く)、「若彼有情不能受持」等とは、知識による理

等とは(者)、無解の機を擧ぐ(智解なきが故に受持する能はず)。《或復有情造諸惡業》等とは(者)、無行の機を擧ぐ(是れ造惡の人なるが故に行無きこと知るべし)。

○「四重八重」とは、『鈔』四(二六)に云く。「男に四重を立て、女に八重を立つ。四重とは(者)、姪・盜・殺・妄、八重とは(者)、四重は前の如し。五に摩觸、六に八事(一に捉手、二に捉衣、三に入屏處、四に共立、五に共語、六に共行、七に身相ひ倚る、八に共期)、七に覆尼、八に隨學苾芻」。

○「五無間罪」とは、五逆なり。之を造る者、決定して無間獄に墮すべし。故に、果に従へて無間罪と云ふ。但し、五逆に單復の別あり。『頌見』八(六二)に釋するが如し。○「謗方等經一闡提」とは、『鈔』四(六二)に、「因果を信ぜざ(不)るを一闡提と名け、大乘を信ぜざ(不)るを謗方等と名く。」と云ふ。

◎次に譬説。

〔良忠〕『決疑鈔』四(六二)に、「若彼有情不能受持」等とは、知識による理解の無い者を挙げる(智慧による理解が無いので受持することができない)。《或復有情造諸惡業》等とは、悟りに到達するための修行の無い者を挙げる(これは造惡の人であるので修行が積めていないということを知らなければならない)とある。

○「四重八重」とは、〔良忠〕『決疑鈔』(二六)に、「男に四つの教団追放となる罪(四重)を立て、女に八つの罪(八重)を立てる。四重とは、姪・盜・殺・妄、八重とは、四重は前(男)と同じで、五に比丘の腋より下、膝より上に触れ、また比丘からそうされること(摩觸)、六に八事(一に手をとる(捉手)、二に衣を捉える(捉衣)、三に隠れたところに入る(入屏處)、四に共に立つ(共立)、五に共に語る(共語)、六に共に歩く(共行)、七に相ひ倚る(身相ひ倚る)、八にもう一度会おうと約束する(共期)、七に他の比丘尼の教団追放となる罪を知りながら言わぬこと(覆尼)、八に出家教団と別に居住する処罰を受けている比丘に従うこと(隨學苾芻)である。」とある。

○「五無間罪」とは、五逆である。この罪を造る者は、必ず無間地獄に墮ちる。果に因んで名づけて無間罪と云う。但し、五逆に単と復の別がある。〔聖岡〕『二藏義見聞』八(六二)に解釋するとおりである。

○「謗方等經一闡提」とは、〔良忠〕『決疑鈔』四(六二)に、「因果の道理を信じない者を一闡提と名づけ、大乘を信じない者を謗方等と名づける。」と云う。

◎素質に依じて教えが説かれたことの説明の第二、譬喩を説く。

【本文】此五法藏譬如乳酪生酥熟酥及妙醍醐。(六八左)

◎後に合釋。

◎素質に依じて説かれたことの説明の最後は、譬喩が五法藏をどう譬えているかを解釈する。

【本文】契經如乳、調伏如酪、對法教者如彼生酥、大乘般若猶如熟酥、總持門者譬如醍醐。醍醐之味乳酪酥中微妙第一。能除諸病令諸有情身心安樂。總持門者契經等中最為第一。能除重罪令諸衆生解脫生死速證涅槃安樂法身已上。

【講義】此(の)一節、句調同じからず。或(い)は、「猶如」、「譬如」等の字を加へ、或(い)は、「者」、「之」等の助字を用(ゐ)るが如き、唯是れ四字の句を作(ら)んが爲めのみ(耳)。

この一節は文章の調子が一定ではない。あるいは、「猶如」、「譬如」等の字を加えたり、あるいは、「者」、「之」等の助字を用いたりしているのは、ただ四字の句を作るためである。

○五味を以て次の如く五藏に配當すれども、天台家所判の如く一一濃淡相生の次第ある(六九右)に非ず。唯、前四味を總じて顯教に比し、醍醐の一味を密教の勝益に譬へしのみ。

○五味を、順序通りに五藏に配當しているが、天台宗の教判のように、一つ一つ濃淡・相生の次第があると言うのではない。ただ前の四味をまとめて顯教に譬え、醍醐の一味を密教の勝れた利益に譬えているだけである。

◎後に今に合す。

◎最後に、今の議論に合わせて解釈する。

【本文】此中五無間罪者是五逆罪也。即非醍醐妙藥者五無間病甚爲難療。念佛亦然。往生教中念佛三味是如總持、亦如醍醐。若非念佛三味醍醐之藥者、五逆深重病甚爲難治。應知。

【講義】「念佛如總持」とは、問(ふ)。眞言念佛俱に逆罪を滅せば、何の異(な)りあるや。答(ふ)。法門に約せば、眞言も念佛も同(じ)く逆を滅すと雖も、若し機根に約せば差別無きに非ず。謂く。眞言は上根を化し念佛は下

「念佛如總持」とは、【問】質問する。眞言も念佛もともに五逆罪を滅するのであれば、どう違うというのか。【答】答える。教えについていうと、眞言も念佛も同じく五逆罪を滅するが、行者の素質についていうと差別がないことはない。つまり、眞言は素質のすぐれた者を導き、念佛は素質の劣った者に利益を与える

根を益するを以て、本（六九左）意とす。全く同日の論に非ず（『鈔』四（六二））。

◎三に念佛下上に在ることを随難す。

【本文】問曰、若爾者下品上生は十悪輕罪之人。何故説念佛乎。答曰、念佛三味重罪尚減何況輕罪哉。餘行不然。或有減輕而不減重。或有消一而不消二。念佛不然。輕重兼減一切遍治。譬如阿伽陀藥徧治一切病。故以念佛爲王三昧。

【講義】「若爾」とは、前段に下下品は五逆の罪人なるが故に之に對して念佛を説くと云（ふ）を承（け）て隨難す。

○「十悪輕罪」とは、十悪即ち輕罪なり。謂（は）く、下三（七十右）品の中に於て下上品は十悪の機、下中品は破戒の類、下下品は五逆の罪人なり。故に次の如く之を輕・次・重罪と云ふ。

○「或有消一」等とは、『鈔』四（六四）に『智論』を引て云く、「復た次に念佛三味は能く種々の煩惱及び先世の罪を除く。餘の諸の三味は能く姪を除く・瞋を除く能はざ（不）る有り。能く瞋を除く姪を除く能はざ（不）る有り。能く癡を除く姪を除く能はざ（不）る有り。能く三毒を除（き）て先世の罪を除く能はざ（不）る有り。是の念佛三味は能く種々の煩惱、種々の罪を除く」と。

○阿伽陀は梵語、此（こ）に普法と云ふ。普く一切の病を去るが故に。

○王三味とは餘に勝るる義を顯はす。王本願に例して知る

ことを、本来の目的とする。全く日を同じくして論じることではできない（良忠）『決疑鈔』四（六二）。

◎答の第三段は、念仏が下品上生に説かれることを難點に随つて「解釈する」。

「若爾」とは前段で、下品下生は五逆の罪人であるから、これに對して念仏を説くと云うのを受けて、引きつづき難詰する。

○「十悪輕罪」とは、十悪は輕罪である。つまり、下三品の中で下品上生は十悪の者、下品中生は破戒の者、下品下生は五逆の罪人である。したがって、順序通りにこれを「輕罪・次罪・重罪」と云うのである。

○「或有消一」等とは、（聖問）『決疑鈔』四（六四）に（竜樹）『大智度論』を引用して、「また次に、念仏三味は、種々の煩惱及び前世の罪を除くことができる。他の諸の三味は貪欲を除くことはできるが瞋恚を除くことができないものがある。瞋恚を除くことができるが貪欲を除く事ができないものがある。愚癡を除くことができるが貪欲・瞋恚を除くことができないものがある。現世における三毒の煩惱を除くことができるが前世の罪を除くことができないものがある。この念仏三味は、種々の煩惱、種々の罪を除くことができる」とある。

○「阿伽陀」は梵語である。中国では普法と云う。普く一切の病を去るからである。

○王三味とは、他の（三味に）勝るといふ意味を表す。王本願と例として理解せ

べし。

よ。

◎四に九品互通を明すに二。先に直釋。

◎答えの四段、九品は互に通じること二段に分けて説明する。先ずは經文に對する直接の解釈。

【本文】凡九品配當は一往義。五逆迴心通於上上、讀誦妙行亦通上下、十惡輕罪破戒次罪各通上下、解第一義發菩提心亦通上下。一法各有九品。若約品即九（七十左）九八十一品也。

【講義】「五逆迴心」等とは、自下再往互（ひ）に通ずることを明す。凡そ九品に横豎あり。『觀經』に上上品は讀誦大乘、乃至、下下品は十念と云（ふ）が如く、一品に各一行の受法を當るは是れ豎なり。當文に「九品配當是れ一往の義」と云ふ即（ち）是（れ）なり。『大經』に三輩各菩提心・念佛を明すが如きは是れ横なり。當文の意は上上品に讀誦大乘より十念に至る九品あり。乃至下下品にも亦讀誦大乘より十念に至る九品あり。故に「九九八十一品」あり。是れ横の義に約して談ず。但し、八十一品、猶ほ是れ横に約する一往の説なり。實には無量無数の品あり。是に由（つ）て、下に迦才の『淨土論』を引（い）て之を知らしむ。

「五逆迴心」等とは、以下、「形式的には九品に配當してはいるが」突き詰める九品が互に通じていることを明らかにする。そもそも、九品に横と豎がある。『觀無量壽經』で、上品上生は讀誦大乘、乃至、下品下生は十念と云うように、一品にそれぞれ一行を配當して説いているとするのは豎である。この文に、「九品配當是れ一往の義」と云うのはこのことである。『無量壽經』に三輩それぞれに菩提心と念仏を明示するのは横である。この文の意味は、上品上生に讀誦大乘より十念に至る九品がある。乃至、下品下生にもまた讀誦大乘より十念に至る九品がある。それゆえに「九九八十一品」ある。これは横の意味について述べたものである。ただし、八十一品も、横についての形式的な説明である。実際には無量無数の品がある。したがって、この後に迦才の『淨土論』を引用してこのことを示している。

而して五逆上上に通ずるに就て、『牒』九（二九）に二説あり。大圓の説は下下に九品ある中の上上に通ずると云ひ、正義の意は豎の上上に通ずると云ふ。問（ふ）。十念直ちに上上に通ずとやせん、將々念數を増すとやせん。答（ふ）。『鈔』四（六四）（に）二義あり。云（く）。若し命延び日

そして、五逆罪を犯した者も上品上生に通じることについて、「聖罔」『決疑鈔直牒』九（二九）に二説ある。大圓の説は下品下生の中に九品あるうちの上品上生に通じると云ひ、白旗正義では豎の上品上生に通じると云う。【問】質問する。十念は直ちに上品上生に通じるのか、はたまた、念仏の數を増やさなければいけないとするのか。【答】答える。「良忠」『決疑鈔』四（六四）（に）二つの

積り運心年たけな闌なる者は、設ひ逆者と雖も上上に生ずべ(可)し。念(七一右)數多(き)が故に。今、通と言(ふ)は(者)、十の數を取るに非(ず)。經に下品に置くは臨終廻心時短促なるが故なり(第一義念數の多少に約す)。又、五逆の十念、直(ち)に上上に生ずべ(可)し。心に強弱有るが故に(第二義、心の強弱に約す)。又、『鈔』四(六五)〔に〕、「問(ふ)」。若し餘の諸行、下品に通ぜば(者)、讀誦等の行、輕・次・重罪を化するや(耶)。答(ふ)。今經の意は(者)、唯(だ)念佛のみ重罪の者を濟ふことを明す。故に極惡最下の(之)機の爲に、方に極善最上の(之)法を説き、以て念佛の(之)功能を顯(は)す(也)。若し此の意に據れば上六品の行、下品(88)に生ずるは(者)、只(だ)是れ善人の中に其(の)機最劣なるが故に下三品に生ずるなり(也)。念佛の重罪の者を化するが如きに非ず。」

◎後に引證結成。

【本文】加之、迦才云、衆生起行既有二千殊。往生見シテ土亦有萬別也。莫見レ一往文而起中封執上。【講義】「迦才云」等とは、「萬別也」に至るまでは、『淨土論』上(八紙)の文なり。是れた啻に八十一品のみならず、機縁千差萬別なれば、品數も無量無數なることを示す。但し、此(の)論文は、迦才法師、極樂を判じて報化二土に

解釈がある。すなわち、もし命が延びて日を重ね極樂往生への思いが年々盛んになる者は、たとえ五逆の罪を犯した者であっても上品上生に生じることができ。念仏の數が多くなるからである。今、「通」と言うのは、十の數を取るのではない。『觀無量壽經』で下品下生に〔十念を〕置くのは臨終に回心したのでは(念仏する)時間が短いからである(第一の解釈は念仏の數の多少によって九品に分けているといふ観点による)。また、五逆の十念は直ちに上品上生に生じることができ。(信)心に強弱があるからである(第二の解釈は(信)心の強弱によって九品に分けているといふ観点による)。また、『決疑鈔』四(六五)〔問〕質問する。若し念仏以外の諸行も下品に通じるといふのなら、讀誦等の行は軽い罪もそれに次ぐ罪も重い罪も除くのか。【答】答える。この『觀無量壽經』に説くところは、ただ念仏のみ重罪の者を救うことができると明らかにすることを意図する。したがって極惡最下の者のために、まさに極善最上の法を説き、それによって念仏のはたらきを明らかにする。もしこの經文の意図によるならば、上六品の行によって下品の往生をするものは、ただ善人の中でも、素質が最も劣っていたので下三品の往生となるのである。念仏が重罪の者を救うのとは同じではない。」とある。

◎九品は互に通じることの説明の第二は、証拠を引用して結論づける

「迦才云」等とは、「万別也」に至るまでは、『淨土論』上(八紙)の文である。これは八十一品だけではなく、教えを受ける衆生の能力が千差万別であるから、品數も無量無數となることを示す。ただし、この論の文は、迦才法師が、極樂を判定して報化二土に通じるといふ説を立てている箇所である。しかしながら今は

通ずる義を成立（七一左）す。然れども今は唯、起行無量なれば品位も亦無量なることを證するのみ（耳）。通報化の義を取るに非ず。是れ所謂る斷章取義なり。「千殊萬別」とは是れ互文なり。

○「莫見一往文」等以下は上の義を結成す。謂（は）く。『觀經』に説くが如き一往の分別を見て九品に限れりと固執する莫れ。「封」は緘なり。

◎三に正（し）く念佛の機能を明す。中に五。一に念佛爲勝を明す。

【本文】其_ノ中念佛_{ハレ}是_レ即勝行_{ナリ}。故引_ニ分陀利_ヲ以爲_ニ其喩_ト。譬_レ意應_レ知_ル。

○「引分陀利」とは經文の意を釋す。

◎二に二聖爲友を明（か）す。

【本文】加之、念佛行者_ヲ觀音勢至_ト如_ク影與_リ形暫_モ不_レ捨離_ス。餘行_ハ（七二右）不_レ爾_ヲにする。

【講義】「加之」の二字は、念佛爲勝の上に更に二聖爲友の益を顯はす意なり。此（れ）に二聖を擧（ぐ）るは且く經文に準じ、又、其（の）勝れたるに約す。實には二十五菩薩諸天等、皆相ひ影護す。（第十五章參看すべし。）

ただ、起行が無量であれば品位もまた無量であることの証拠とするためにのみ、ここに引用されている。報化二土に通じるといふ説を取るのではない。これはいわれる斷章取義である。「千殊万別」とは互文である。

○「莫見一往文」等以下は、以上の説明を結論づける。つまり、『觀無量壽經』に説かれるような一応の区別を見て九品に限られると固執してはいけない。「封」は「緘（とじる）」である。

◎宗祖の私見の第三段は、まさしく念仏のはたらきを説明する。それに五段ある。その第一段は念仏が勝れていることを明らかにする。

【本文】其_ノ中念佛_{ハレ}是_レ即勝行_{ナリ}。故引_ニ分陀利_ヲ以爲_ニ其喩_ト。譬_レ意應_レ知_ル。

【講義】「其中」とは、「其」の語は上の九品が互に通じていると説くことを指す。

○「引分陀利」とは『觀無量壽經』の文の意味するところを説明している。

◎念仏のはたらきを説明する第二段、觀音・勢至の二聖を友とすることを明らかにする。

【本文】加之、念佛行者_ヲ觀音勢至_ト如_ク影與_リ形暫_モ不_レ捨離_ス。餘行_ハ（七二右）不_レ爾_ヲにする。

【講義】「加之」の二字は念仏がその他の行に対して勝れているとする上に、さらに觀音・勢至二菩薩が友となるという利益を明らかにするという意味である。ここで觀音・勢至の二菩薩を挙げているのは、まずは『觀無量壽經』の文にしたがっているものであり、また、觀音・勢至が勝れていることに依るものである。実際には二十五菩薩や諸天等も皆、影のように護るのである。（第十五章を参照せよ。）

◎三に決定得生を明す。

◎念仏のはたらきを説明する第三段、必ず往生することができることを明らかにする。

【本文】又念佛者捨命已後決定往生極樂世界。餘行不定。

「餘行不定」とは、不定の語は「百人の中に」一・二人、「千人の中に」三・五人が往生をできることを表す。これは、念仏以外の行では三心を具足することが困難だからである。

【講義】「餘行不定」とは、不定の言は一・二・三・五の往生を得ることを顯〔は〕す。是れ三心具し難きが故なり。

◎念仏のはたらきを説明する第四段、現当二世にわたる利益を明らかにする。

◎四に現當兩益を明す。

【本文】凡流五種嘉譽。蒙二尊影護、此是現益也。亦往生淨土乃至成佛。此是當益也。(七二左)

【講義】「流五種嘉譽」とは、前に既に辨ずるが如し。

「流五種嘉譽」とは前に既に説明したとおりである。「流」とは「伝」である。

「流」とは傳なり(也)。是れ經の「是人中芬陀利華」の文に當る。

これは、「觀無量壽經」の「是人中芬陀利華」の文に相當する。

○「蒙二尊影護」とは、經の「觀音勢至爲其勝友」の句を指す。

○「蒙二尊影護」とは、『觀無量壽經』の「觀音勢至爲其勝友」の句を指す。

○「亦往生」等の二句は經の「當座道場」等の二句の意なり。

○「亦往生」等の二句は『觀無量壽經』の「當坐道場」等の二句の意をとつてい

◎五に始終二益を明す。

【本文】又道綽禪師於念佛一行立始終兩益。安樂集云、念佛衆生攝取不捨。壽盡必生。此名始益。言終益者依觀音授記經云、阿彌陀佛住世長久兆載永劫亦有滅度。般涅槃時唯有觀音勢至住持安樂接引十方。其佛滅度亦與住世時節等同。然彼國衆生一切無有下觀見佛者。唯有一向專念阿彌陀佛。往生者常見彌陀現在不滅。此即是其終益也。〔已上〕

◎念仏のはたらきを説明する第五段、始益・終益の二益を明らかにする。

【講義】『授記經』の文は取意なり。「亦有滅度」とは、亦『授記經』の文は取意である。「亦滅度」とは、「亦」の語によつて表されるもの

【講義】『授記經』の文は取意なり。「亦有滅度」とは、亦『授記經』の文は取意である。「亦滅度」とは、「亦」の語によつて表されるもの

の言の表する所、念佛の衆生に對しては滅度せざる意を顯はす。「滅度」は涅槃の翻名なり。「般涅槃」とは、般の字、入聲に呼ぶ。是れ亦梵語にして入の義なり。

○「彼國衆生一切」等とは、「彼國衆生」の文は、下の「專念阿彌陀佛」に對して、別して餘行の機を指す意なり。一切の言亦然り。「無有觀見佛」とは、何故に念佛の機は常に不滅を見、餘行の者は入滅を見るやと云ふに就て、『鈔』四（六七）に三義を以て釋成す。且く一説（『安樂集』に據る）を擧げば、此に滅度と云（ふ）は、是れ隱没の相なり。『寶性論』に據るに、報身に五種の相あり。休息隱没は其（の）隨一なり。所謂る休息隱没とは、所化の衆生、下位より上位に昇進の時、能化も亦之に應じて前の劣身を隠して後の勝身を現す。餘行の機は之を見（七三左）て入滅したまふと謂ふのみ。實の涅槃には非ず。何となれば、報身は常住なるが故に。以上、其（の）大要を辨ず。委くはし旨は『鈔』に至（つ）て研究すべし。

◎四に總結。

【本文】當ニ知ル。念佛ハ有リ如キ此等現當二世始終兩益。應シ知ル。

（以上第十一章を解し畢る。）

選擇本願念佛集卷下本

は、念仏の衆生に對しては滅度しないことを明らかにしようとしている。「滅度」は涅槃を翻譯した言葉である。「般涅槃」とは、「般」の字は入聲に発音する。これもまた、梵語で、「入る」という意味である。

○「彼國衆生一切」等とは、「彼國衆生」の文は下の「專念阿彌陀佛」に對して、念仏以外の行によつて往生した者を區別して指している。一切の語も同様である。「無有觀見佛」とは、どうして念仏によつて往生した者は常に不滅を見、念仏以外の行で往生した者は入滅を見るのかと云うことについて、「良忠」『決疑鈔』四（六七）⁽⁴⁾に三つの解釈を立てている。とりあえず（『安樂集』による）一説を挙げると、ここで滅度と云っているのは、隱没の相である。『寶性論』によると、報身に五種⁽⁵⁾の相がある。休息隱没はその中の一つである。ここでいう休息隱没とは、仏に教化される衆生が、下位より上位に昇進する時、教化する仏もまた、これに應じて前の劣つた身体を隠して後の勝れた身体を現す。念仏以外の行の者はこれを見て入滅されたと思うが、まことの涅槃ではない。なぜなら、報身は常住であるからである。以上、その大要を説明した。くわしい内容は『決疑鈔』を読んで研究するように。

◎宗祖の私見の第四段は、總括。

（以上、第十一章を解釈しおわる。）

選擇本願念佛集講義卷下本

註

- (1) 推功帰本 末の功を推して、根本の徳に帰せしめること（中村元『仏教語大辞典』八〇八頁d段）
- (2) 勸持流通 『選択伝弘決疑鈔』「流通に二有り。一に勸持流通なり。附屬を除きて外の自余の流通、是なり（也）。二に付屬流通なり。持名の文、是なり（也）。勸持付屬の（之）名目は（者）、天台よ（自）り出づ。先づ勸持とは（者）迹門の中ごろよ（從）り本門神力品の末に（于）至るまで、總じて機に相對して（而）、暫く受持流通を勸むと雖も、慇懃の儀に非ず。然るに迹門は（者）、説、未だ竟らず（未・再説）。故に付屬無し（也）。故に積して云く。但だ勸持のみ有つて屬累無し（也）と。」（『浄全』第七卷三二一五頁上）
- (3) 法聰『釈觀經記』（『浄全』第五卷二三八頁上）
- (4) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷三〇五頁上）
- (5) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷三〇五頁下）
- (6) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷三〇六頁上）
- (7) 「往生以後」『浄全』は「往生已後」
- (8) 善導『觀經疏散善義』（『浄全』二卷七一頁上）
- (9) 從容 勧め誘うこと。聳漚。（中村元『仏教語大辞典』七二頁b段）
- (10) 『選択集講義』において、次の第十二章冒頭の来意に、「当章の来意を明さば、前章に於て一往雜善に約對して専ら念仏の超勝を弁す。今、再往、定散に超勝することを顯示し、以て廢立の旨を成立す」とあり、このことを指すものと思われる。
- (11) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷三〇六頁下）
- (12) 『觀經疏散善義』及び『選択集』は「一明専念弥陀仏名」であるが、『選択集講義』は「一明専念弥陀名」と「仏」の字が脱している。
- (13) 持阿『選択決疑鈔見聞』（『浄全』第七卷八七五頁下）
- (14) 『論語』公冶長第五・十八「子曰、臧文仲居蔡、山節藻梲、何如其知也。」
- (15) 〔司馬遷〕『史記』卷二二九第六十八龜策列伝に「龜千歲乃遊蓮葉之上」と、蓮華ではなく蓮葉となっている。
- (16) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷三〇六頁下）
- (17) 第四十六隨意聞法願 康僧鑑訳『無量寿経』「設我得仏。國中菩薩。隨其志願所欲聞法自然得聞。若不爾者。不取正覺。」（『浄全』第一卷一〇頁）
- (18) 第二十三供養諸仏願 康僧鑑訳『無量寿経』「設我得仏。國中菩薩。承佛神力供養諸仏。一食之頃不能遍至無量無數億那由他諸佛國者。不取正覺。」（『浄全』第一卷八頁）
- (19) 第二十四供具如意願 康僧鑑訳『無量寿経』「設我得仏。國中菩薩。在諸仏前現其徳本。諸所欲求供養之具。若不如意者。不取正覺。」（『浄全』第一卷八頁）
- (20) 第十一必至定聚願（住正定聚願） 康僧鑑訳『無量寿経』「設我得仏。國中人人。不住定聚。必至滅度者。不取正覺。」（『浄全』第一卷七頁）
- (21) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷三〇七頁上）
- (22) 『浄全』第七卷二十八頁
- (23) 良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷三〇七頁下）
- (24) 見思（見思惑） 見惑と思惑。惑は煩惱の意で、見惑は、仏教の真理である四諦の理に迷うことや、邪教などに迷って起こす後天的煩惱のこと。思惑は、現象的なことにとられることや、生まれつき持っている先天的煩惱のこと。天台宗では塵沙・無明と合わせて三惑といひ、これを三界の惑とする。（石田瑞磨『例文仏教語大辞典』二六二頁a段）
- (25) 塵沙（塵沙惑） 三界の内外にわたる惑で、仮観によって断たれるもの。他の人を導くのに邪魔になる煩惱（石田瑞磨『例文仏教語大辞典』六二二頁c段）
- (26) 無明（無明惑） 煩惱（惑）のなかのもっとも微細な根源をなすも

ので、中観によって断たれるとされる。(石田瑞麿『例文仏教語大辞典』一〇五八頁a段)

(27) 空仮中 一切の存在は本来、空無であることを空といい、その空であるものが因縁の和合によって仮に生じて、現にあるものとして存在していることを仮というが、空にせよ仮にせよ、それらは一切の存在の一面であって、空でも仮でも無い絶対の真理は中である、とするもの。これを空仮中の三諦(三つの真理)といい、これらの真理を体認する修行方法を空仮中の三観と名づける(石田瑞麿『例文仏教語大辞典』二〇二頁c段)

(28) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷三〇七頁下)

(29) 聖阿『決疑鈔直牒』(『浄全』第七卷五八六頁上)

(30) 空海『弁顕密二教論』(『大正蔵』七七所収、二四二七番)

(31) 道安『二教論』(道宣『広弘明集』所収(『大正蔵』五十二卷一三六中))

(32) 四法 教・理・行・果の四つ。仏教の真理としての理と、それをあらわす教え、その教えによる実践修行と、その果としての悟り。四法宝とも。(石田瑞麿『例文仏教語大辞典』四七四頁b段)

(33) 『六波羅蜜経』 『大乘理趣六波羅蜜多経』卷一(『大正蔵』八卷八六八頁)。

(34) 非想非非想処は朦朧とした精神状態であり(定品第四頌)、決して無漏とはならない(定品第五頌)

『阿毘達磨俱舍論』 分別定品「空無辺等三 名從加行立 非想非非想 味劣故立名」(『大正蔵』第二十九卷百四十五頁下)

「此本等至八 前七各有三 謂味浄無漏 後味浄二種」(『大正蔵』第二十九卷百四十六頁b) (本庄良文研究員から「示唆いただいた。)

(35) 持阿『選択決疑鈔見聞』(『浄全』第七卷八九四頁)に如灌「浄業記」から引用されている。出典は「左伝」襄公三十一年「有威而可畏、謂之威。有儀而可象、謂之儀。」

(36) 僧伽跋陀羅訳「善見律毘婆沙」 「毘尼藏者是佛法壽。」(『大正蔵』第二十四卷六七五頁上)

道宣撰『四分律刪繁補闕行事鈔』 「善見云。毘尼藏者。佛法壽命。」(『大正蔵』第四〇卷五〇頁中)

(37) 師 聖阿の著作には「師仰」として解釈を挙げる箇所が多く見られる。師とは誰を指すかについては未詳。

(38) 聖阿『決疑鈔直牒』(『浄全』第七卷五八六頁下)

(39) 五蘊「蘊」は梵skandhaの訳。あつまりの意。色(物質)・受(印象・感覚)・想(知覚・表象)・行(意志などの心作用)・識(心の五つをいい、総じて有情の物心の両面にわたる。因縁によって生ずる有為法をいう。また、心身環境をも示す。(石田瑞麿『例文仏教語大辞典』二九〇頁c段)

(40) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷三〇八頁下)

(41) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷三〇八頁下)

(42) 聖阿『頌義見聞』(『浄全』第十二卷五四一頁下)

(43) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷三〇八頁下)

(44) 天台宗では、五味を五時に配当し、五時教が次第に生じ(約数相生)、機が次第に熟す(約機濃淡)のたとえ。 (中村元『仏教語大辞典』三七五頁d段「五味」の項)

(45) 『選択集講義』は「為」を「これ」と訓読する。『古書虚字集釈』二「為、是也、論語微子篇、問二於桀溺一桀溺曰、子為誰、曰、為仲由」

(46) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷三〇八頁下)

(47) 善導『観経疏散善義』 「下品上生者従りは正しく其の位を弁定することを明かす。即ち是れ十悪を造る軽罪の凡夫人也」(『浄全』第二卷六十七頁上)

(48) 善導『観経疏(散善義)』 「下品中生者従りは正しく其の位を弁定することを明かす。即ち是れ破戒次罪の凡夫人也」(『浄全』第二卷六十

八頁上)

- (49) 善導『観経疏散善義』「下品下生者従りは正しく其の位を弁定することを明かす。即ち是れ五逆等を造れる重罪の凡夫人也」(『浄全』第二卷六十九頁上)
- (50) 『大正蔵』二十五卷一〇九頁上
- (51) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷三〇九頁下)
- (52) 道綽『安樂集』「此の念仏三昧は即ち是れ一切の三昧の中の王なるが故也」(『浄全』第二卷六七六頁上)
- (53) 聖岡『決疑鈔直牒』(『浄全』第七卷五八七頁下)
- (54) 不明
- (55) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷三〇九頁下)
- (56) 下品『選択集講義』では「下下」とあるが、『選択伝弘決疑鈔』は「下品」であり訂正した。訂正した本文によって訳した。
- (57) 念仏『選択集講義』では「今仏」となっているが、『選択伝弘決疑鈔』は「念仏」であり訂正した。ここでは「念仏」として訳した。
- (58) (56)に同じ。
- (59) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷三二〇頁下)
- (60) 迦才『浄土論』卷上(『浄全』第一卷六七六頁上)
- (61) 断章取義 原文の意味に関係なく、自分の意図に合わせて、その一部分だけを切り取って引用すること。
- (62) 互文 「天地長久」を「天長地久」と言うように二つ以上の文または句で、一方で説くことが他方にも通じ、相補って意味を完全にするような文の構成法を互文という。(『漢文解釈辞典』(国書刊行会)五八七頁)
- (63) 当坐道場等の二句『観無量寿経』「当坐道場 生諸仏家」(『浄全』第一卷五十一頁)
- (64) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷三二二頁下)
- (65) 五種の相 説法・可見・諸業不休息・休息隱没・示現不実体(『究

竟一乗宝性論』大正蔵第三十一卷八四三上)

(うえの ただあき 嘱託研究員、浄願寺副住職)